

Mary Shelley, *The Last Man* と William Godwin, *Caleb Williams* における 間テクスト的関係の解明と考察

野間 由梨花

はじめに

Barbara Johnson (2014)は、Mary Shelley は William Godwin から語りの手法の多くを学んだと指摘している。さらに彼女は、*The Last Man* の語りは *Caleb Williams* のそれと類似していると言及している。しかし、彼女の指摘はそれぞれの登場人物が“a mentor or an educated double” (62)における相違を示す程度にとどめている。

本発表では、シェリーの *The Last Man* とゴドウィン の *Caleb Williams* とを間テクスト的に考察し、二作品における語りと物語の構造の類似点を比較する。物語の展開方法による二項対立的要素の示し方を探り、メタフィクションの要素がみられる両作品において、主人公の記録を残すことの意味について考える。また、ゴドウィンの小説と間テクスト的に考察することで、シェリーの小説の持つ意味を明らかにしたい。

The Last Man と *Caleb Williams* における一人称語りの効果

地主フォークランド氏とその秘書ケイレブとの対立による葛藤の中で、ゴドウィンの *An Enquiry Concerning Political Justice* (1793)において展開されていた思想が物語を通して強く訴えられている。一方、シェリーの *The Last Man* は、疫病による人類の滅亡までが描かれている。*Caleb Williams* における、追うものと追われるものという二者の対立が、最終的に両者の崩壊という結末になるのだが、シェリーの他作品においても同様の傾向が見られる。例えば、*Frankenstein* (1818)における、フランケンシュタインと怪物の関係もその代表として挙げられ、これはシェリーがゴドウィンの語りの手法を取り入れていたためであると言える。

また、ゴドウィンの *Caleb Williams* は一人称語りで展開されているが、これもシェリー作品が同様に一人称語りが多く見られる理由であると考えられる。ゴドウィンは、“Godwin's 1832 account of the composition of *Caleb Williams*” printed from Godwin's preface to the 'Standard Novels' edition (1832) of Fleetwood の中で“I began my narrative, as is the more usual way, in the third person. [...] It was infinitely the best adapted, at least, my vein of delineation, where the thing in which my imagination revelled the most freely, [...]” (CW 350)と述べている。

ゴドウィンが意見書ではなく、小説を執筆する際に一人称語りを採用した理由は、内的感情を分析することが得意であったからだと言及しているが、シェリー作品にもその要素が強く見られる。特に本作品においては、シェリーがシェリー自身を登場人物に重ねていると考えられるし、友人に宛てた手紙の中で “[...] in Lord Byron and Count Adrian [there are] faint portraits ... of Bn [Byron] and S — but this is a secret” (MWSL 566)と述べているように、Percy Shelley や Lord Byron を登場人物のモデルにしていることも指摘できる。シェリーが自身を慰める方法の一つとして小説を書くことを選んでいるのだとしたら、まさに主人公の内的な感情、つまり自分自身の心境が強く反映されていることがわかる。

両作品における主人公の語りにも類似点を見ることができる。一人称語りであるため両作品とも物語は回顧録のように語られるが、書き始められた頃の状況が把握でき、その結末における悲劇性を示唆していると言える。例えば、ケイレブが “My life has for several years been a theatre of calamity. I have been a mark for the vigilance of tyranny, and I could not escape.” (CW 3)と記していることから、不運な運命と、未だ幸福にたどり着けていない主人公の状況が読み取れる。一方、ライオネルも “My fortunes have been, from the beginning, an exemplification of the power that mutability may possess over the varied tenor of man's life.” (LM 5)と述べ、自らの残酷な運命を示し、その悲劇的な結末を示していることがわかる。

The Last Man と *Caleb Williams* における二項対立とその曖昧さ

The Last Man においては人間と疫病、生と死の対立が浮き彫りになり、疫病によって人々の命が奪われていく中、人間が疫病と戦うことによって、生きることが強調されている。ライオネルは “Yet we were not all to die. Not truly, though thinned, the race of man would continue, and the great plague would, in after years, become matter of history and wonder.” (LM 208)と、人間が生き残ることを強く主張している。しかしながら、死が迫り来る中、“Great God! would it one day be thus? One day all extinct, save my life, should I walk the earth alone? Were these warning voices, whose inarticulate and oracular sense forced belief upon me?” (LM 212)と、ライオネルもまた不安を感じていることがわかる。人間と疫病、生と死という対立が激しさを増す中で、死者数の増加の伴い、死という恐怖が生きている人間を追いかけていたのにも拘わらず、その立場が急に逆転し、むしろ生きている人間が死を追いかけていくような展開へと移り変わる。生きることには希望を持っていた人間は、いつしか死を希望するようになり、生と死の価値が従来の生きることを良しとし、死を悪と捉えていた価値観から逸脱しているのである。

一方、*Caleb Williams* では、ケイレブとフォークランド氏との対立が考え方の面でも明らかになる。ケイレブがフォークランドの考え方を指摘し、アレクサンダー大王をテーマに正義と不名誉に関する議論を交わす。ケイレブがアレクサンダー大王に対するネガティブな考え方と、フォークランドの不義とを照らし合わ

せてくるため、フォークランドは怒りを滲ませながら、“You are not candid — Alexander — you must learn more clemency — Alexander, I say, does deserve this rigour.” (CW 109)と意見する。ケイレブとフォークランドの立場の違いが、歴史的事実の解釈にすら違いを生み、それが考え方の違いを生んでいることがわかる。地主と労働者階級、アレクサンダー大王と彼の働きに関わった人々との対比は、それぞれが支持する相手によって表現される。しかし、この対立から生まれた正義と不名誉という対立は、その対立が激化していき、立場が常に入れ替わる中で、どちらか一方が正しいという関係から逸脱していくことになる。

Caleb Williams においては、対立は、ケイレブとフォークランドの異なる主義を掲げた、身分の違う人間同士の対立であるが、*The Last Man* では疫病と人間、いわば生と死の対立である。しかし、作品内ではその対立構造は同等の重みを与えられて扱われており、両作品の類似性を高める結果となっているように感じられる。どちらの作品にも共通していることは、どちらかの価値観の勝利であったり、一方の見方だけを強く押し付ける構造になっていないことである。しかし、どちらかだけを強調していないことによって、物事の本質を映し出していることがわかる。

The Last Man と *Caleb Williams* における「書くこと」の意味

一人称で語られることで、主人公によって明らかにされてきた事実が物語を通して主観で語られてゆくのだが、*Caleb Williams* において実際の結末はあとがきに綴られ、答え合わせのように物語が終焉する。後書きの存在によって、予期されていたケイレブの死という結末が裏切られることになる。また、ケイレブの存在が明らかになることによって、物語は階級の対立に白黒をつけることが目的ではなくなる。*The Last Man* においても、生と死という対立におけるどちらか一方の存在証明でなく、ライオネルが生き残ることにより、物語の結末は生き延びることだけが目的ではなくなる。

また、主人公が記録に関しての感情や、書き始めた理由を説明する場面が設けられているのも特徴的である。ケイレブは自身が死にいたる結果になれば書物が代弁してくれるはずだと他者に記録を託す。対してライオネルは地球上最後の一人となり、人類の存在を示す書物として残る。追うもの対迫られるものという構造が成立し、その対立が激化していく中でも類似点が確認できる。

それでは、ケイレブとライオネルはいかなる動機のもとでこのような記録を書くに至ったのだろうか。ケイレブは、“I began these memoirs with the idea of vindicating my own character. I have now no character that I which to vindicate: [...]” (CW 303)と締め括り、記録がフォークランドの立場を明らかにしたことで、彼の存在を強く打ち出したことを示し、弱者の勝利でも正義の定義づけでもなく事実の羅列となった。

一方でライオネルは、“I will write and leave in this most ancient city, this ‘world’s sole monument’, a record of these things. I will leave a monument of the existence of Verne, the Last Man.” (LM 372)と、「書く」理由を述べている。ライオネルの生きていた証明のために「書き記した書」という位置づけである。また、初めは疫病や自分自身に関することのみを書こうとしていたと述べているライオネルであるが、エイドリアンとの出会いから、人々の姿まで描ききることによって、ライオネルだけでなく、その時に生きていた人々の存在も証明することになったと言える。さらに、ライオネルが“I have brought it to an end — I loft my eyes from my paper — again they are lost to me. Again I feel that I am alone.” (LM 372)と述べることによって、さらに彼の存在が際立つのである。

おわりに

The Last Man と *Caleb Williams* とを比較することによって、シェリーがゴドウィンの語り的手法に着目し、それを取り入れたことが、彼女の創作におけるゴドウィンの影響の大きな割合を占めていることがわかる。しかし、彼女の注目はその語りの構造であり、語りの意図ではない。その登場人物の「書くこと」に対する姿勢は異なる。それは、ゴドウィンとシェリーの双方の創作における意図に相違があるからである。作中には政治的な話も含まれていることは否めないし、アナーキーな状態が描かれているシーンも多数あると言える。これはゴドウィンの思想をシェリーが受け取っているからであると言えるポイントである。しかし、小説においてシェリーは単に思想の開示をしようとしていたのだろうか。シェリーは1822年11月17日の日記に“I shall write his life — & thus occupy myself in the only manner from which I can derive consolation” (MWSJ 444-45)と記している。彼女にとって書くことは、彼女を癒す方法の一つであったと言えるのである。シェリーは、ゴドウィンとは小説という媒体で政治的な意見を共有をしたのではなく、自ら、作品を創作することにおける「書くこと」の意味を見出していたことがわかるのだ。

引用文献

Godwin, William. *Caleb Williams*. Oxford University Press, 2009.

Johnson, Barbara. *A Life With Mary Shelley*. Stanford University Press, 2014.

Shelley, Mary. *The Last Man*, ed. with an Introduction by Pamela Bickley Wordsworth Editions, 2004.

The Journals of Mary Shelley 1814-1844, ed. by Paula R. Feldman & Diana Scott-Kilvert. Oxford U.P., 1987.

The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley (vol.I), ed. by Betty T. Bennett. The Johns Hopkins U.P., 1980.